

## [研究論文]

## 言葉の意味と使用

塚原典央

## はじめに

後期ウィトゲンシュタインにおける言葉の「意味」に関する主張として、しばしば次の二点が挙げられる。一つは『哲学探求（以下『探求』と略記する）』第1部第43節を引き合いに出して、後期ウィトゲンシュタインは言葉の意味について「意味の使用説」を主張したとするものである<sup>1)</sup>。もう一つは、もし後期のウィトゲンシュタイン本人が言葉の「意味」とは何かと問われたならば、「意味」という言葉を使う様々な言語ゲームがあり、それらをよく見れば「意味」という言葉の使用に家族的類似性が見出されるだろう、それで終わり、と答えるであろうということに他ならない。このように述べられていることは確かだが、またこれらに明確な理解が得られていないことも事実である。

ウィトゲンシュタインにおける言語の意味についての見解は、前・後期で大きく異なっている。いやむしろ逆に、その違いによって前期と後期とが区別されている。小論では、彼の後期における言語の意味に関する見解について、後期における前期批判を通して、また前・後期の主張を対照させることによって、その解明を試みることにしたい。

## 1：『論考』の意味の対象説

『論理哲学論考（以下『論考』と略記する）』において展開される前期ウィトゲンシュタインの言葉の意味についての見解を一言でまとめるならば、「論理的原子論」と「命題の像理論」に基づく「意味の対象説」を主張したと、いうことになる。そして『論考』においてすべての軸となるものは、世界の持つ「論理」に他ならない。この世界の「論理」が、「文字記号」で構成される「言語」と「思念」によって構成される人間の「思考」とに共有されている。

すなわち、世界は諸事実から、事実は諸事態から、そして事態は諸対象から構成されている（論理的原子論）が、これに対応して言語は諸命題に、命題は諸要素命題に、そして要素命題は諸名の配列に分析される。つまり、世界におけるの対象と言語におけるの名が一对一对応することによって、言語は世界の論理を写し取っている。言い換えれば言語を構成する命題は、世界を構成する事実の写し絵となっている。つまり命題は世界の論理的像になっている（命題

---

受付日 2013.11.1

受理日 2013.12.26

所属 学術教養センター

の像理論)。したがって、名の意味とは、名が一对一对応している対象そのものということになる（意味の対象説）。さらに、対象と名が一对一对応するのと同じ仕方で、思考を構成する思念が対象と一对一对応している。よって、命題が世界の論理的な像であるように、思考も世界の心的な論理的な像となっている<sup>2)</sup>。

## 2：『探求』の意味の対象説批判その1：『論考』あるいは言葉の意味と担い手

この『論考』の意味の対象説に対する『探求』における批判の一つ目は、いささか虚を突かれたような、あまりに素っ気ないものである。少し長くなるが『探求』から引用する。

『探求』 I §41：第15節においてわれわれは、第8節の言語に固有名を導入した。いま、「N」という名前を持つ道具が壊れてしまったとしよう。Aはそのことを知らずに、Bに「N」という記号を示した。この場合、この記号は意味を持っているのか、それとも持っていないのか。——Bはこの記号が示された時、何をすべきなのか。——われわれはこの点について何も取り決めていなかった。Bは何をするのだろうか、と問われるかも知れない。さて、途方に暮れて立ちすくむかも知れないし、あるいはAに壊れた破片を示すかも知れない。そのとき、「N」は無意味になってしまったと言えるかも知れない。そしてわれわれの言語ゲームにおいては、この「N」という記号にはもはやいかなる使用もない（われわれが新たな使用を与えない限りは）、ということの意味するだろう。またどのような理由であれ、その道具に別の名前をつけ、この言語ゲームにおいて「N」という記号をもう使わないとすれば、やはり「N」は無意味になるだろう。——しかしわれわれはまた、道具が壊れてしまっているのにAがこの記号を与える場合には、Bはそれに対する答として首を振らなくてはならない、と取り決めておくこともできる。——この場合には、「N」という命令は、その道具が存在しないときでも言語ゲームに受け入れられるのであり、「N」という記号はその担い手が存在しなくても、意味を持つと言うことができよう。

ここでウイトゲンシュタインの言いたいことは明確だと思われる。言葉の「意味」と言葉の「担い手」は区別されなければならない。

例えば、L. ウイトゲンシュタインは1951年に亡くなっているが、もし対象が言葉の意味であり、対象がなくなることがイコール言葉の意味がなくなることであるならば、現在「L. ウイトゲンシュタイン」という言葉には意味がないことになる。また2001年9月11日に破壊されてしまっているが、「ニューヨークのワールド・トレード・センター」という言葉はインクの染みになってしまっている訳ではない。言葉が指し示している対象は「担い手」であって、「意

味」ではないのである。『論考』の意味の対象説は、言葉の担い手と意味を取り違えていたことになる。

このように『論考』においては記号によって論理的に構成された像としての命題と、対象によって論理的に構成されている事実との関係のみが問題になっているのであり、その命題を具体的に作り上げ、使用する人間については、全く考慮されていない。確かに人間の思考が挙げられており、その構成要素は心的な思念というものではあるが、命題と同様に世界の論理的像であることに変わりはない。よって、像としての思考は命題の作成・運用にも、また思考自体や命題がどのようにしてその真偽が決定されるのか、真偽の決定過程にも関わることはない。『論考』では世界と命題や思考という像との関係のみが問題にされ、その関係とは世界の有する論理を共有することに他ならない。

### 3：『探求』の意味の対象説批判その2：心的なもの

意味を対象だと考えるいわゆる「意味の対象説」を少し広く捉えるならば、『論考』のように言葉の指し示す対象そのものばかりではなく、言葉と対象の間に介在するものをその候補として考えることが出来るかも知れない。例えば、観念や概念そして理解、イメージといった心的な対象である。この点について『探求』では、「言葉の意味の理解とは、一定のイメージとといった心的な像を持つことである」という見解への批判として論じられている。そしてウイトゲンシュタインは「立方体」という言葉を例にとり、次のように述べている。

『探求』 I § 139 [部分]：もしある人が私に、例えば「立方体」という語を言えば、私はその語が何を意味しているのかを知る。つまり私はその語の意味を理解する。しかし私がその語の意味を理解するとき、その語のすべての使用が私の念頭に浮かび得るだろうか。

そうかもしれない、しかし他方ではその語の意味はその語のその [すべての] 使用によって決定されているのではないか。そしてこれらの決定は矛盾し得るのではないか。われわれがこのように一瞬の内に把握するものは、その語の使用に一致したり、適合したり、また適合しなかったりし得るのか。そして、一瞬の内にわれわれに現れるもの、一瞬の内にわれわれの念頭に浮かぶものは、どのようにして使用と適合することができるのか。

われわれがある語を理解するとき、われわれの念頭に浮かぶものは一体何なのか。——それは何か像のようなものではないのか。それは像ではあり得ないのか。

——中略——

もちろん立方体の像はわれわれに「立方体」という語の一定の使用を示唆する。

しかし私はその像を違う仕方でも使用することもできる。

「立方体」という言葉を理解している人の心に、必ず立方体の像が浮かんでいるだろうか。言い換えれば、立方体の像が心に浮かんでいることが、この言葉を理解していることの必要十分条件になっているだろうか。実際には浮かんでいることもあれば、そうでないこともあるはずである。「山」や「机」といった具象的なもの場合はまだしも、抽象的な「責任」、「高さ」といったものについて、そもそもどのような像を思い浮かべればよいのだろうか。また仮に何らかの像が浮かんだとしても、その像は人々の間で一致するのだろうか。逆に同じ心的像が二人の人の心に浮かんでいたとしても、それらの像は同じ言葉に結びついているだろうか。ある人が「立方体」という言葉で思い浮かぶ像は、他の人にとっては「サイコロ」という言葉と結びついているかも知れない。

そしてさらに、この心的な像を紙に書かれた像に置き換えたとしても、論点に変わりはないだろう（『探求』I §141参照）。つまり、「『立方体』という言葉」と「立方体というもの」を結合させる媒介としての「立方体の像」という図式は固定できるだろうか。像は言葉とものを必然性を持って結合することができるだろうか。ある言葉とある像を結びつけるために更なる媒介1が必要になるとすると、その言葉とその媒介1を結びつけるために更なる媒介2が、そして・・・媒介nが必要になるのではないか。同様にその像と対象であるものを結びつけるために更なる媒介①が必要になるのではないか、しかしそうするとさらにそのものとその媒介①を結びつけるために更なる媒介②が、そして・・・媒介④が必要になるのではないか<sup>3)</sup>。

#### 4：「意味」など問題になっていない

このような議論は『論考』における世界の持つ「論理」のように、世界と言語を必然性を持って結びつけるものの存在を、例えば世界と言語記号を結合する「意味」なるものの存在を前提にしている。言い換えれば、『論考』において世界と言語についての考察の軸となったものが世界の持つ「論理」であったように、世界と言語に関する考察の軸となる「意味」が前提されているのである。これに対して後期ウイトゲンシュタインはわれわれの言語使用という行為に注目している。言葉はわれわれ人間が使うもの、つまり言葉はある時、どこかで、誰かによって使用されるものに他ならない。言葉に関して具体的な使用状況を捨象して、抽象的に扱うことはできる。しかしそれは言葉についての第二義的な扱いに過ぎないのであって、第一義的には言葉は具体的な状況において実際に使用されるものである。後期ウイトゲンシュタインは、われわれが実際に言語を使って行う活動・営み・生活という視点から、言語を捉え直そうとしている。この点を強調するためにウイトゲンシュタインは「言語ゲーム」という言葉を用いている。

『探求』 I § 7 [部分] またわれわれは第二節の語の使用の全課程が、子どもがその母語を覚えるための諸ゲームの一つであると考えられることもできる。私はそれらのゲームを「言語ゲーム」と名付けようと思う。そしてまた私は原初的な言語使用についても、しばしば言語ゲームとして語るだろう。

そしてまた石の名前を呼ぶ過程や、手本として言われた語を口真似して言う過程も、言語ゲームと呼ぶことができるだろう。輪踊りゲームで使用される語の多くの使用について考えてみよ。

私はまた、言語とそれが織り込まれている行為の全体をも言語ゲームと呼ぶだろう。<sup>4)</sup>

そしてウイトゲンシュタインは、われわれの言語の基礎を見るために、ごく初歩的な言語の例として二つの原初的な言語ゲームを挙げている。それらは『探求』第1部第1節の「『五つの赤いリング』の買い物ゲーム」と、続く第2節の「石材の運搬ゲーム」である。前者はある人（おそらく子ども）が「五つの赤いリング」と書かれた紙を持って、八百屋へリングを買いに行くという場面が想定されている。この人は店の人（こちらもおそらく子ども）にこの紙を見せる。すると店の人はこの紙に書いてある文字や色見本を手がかりに、買い物に来た人に五つの赤いリングを渡すという物語になっている。そしてここで問題となるのは、第1節最後の次の部分である。「——それでは、「5」という語の意味は何か。——ここではそのようなことは、全く問題になっていない。ただ、「5」という語がどのように使用されるのか、ということだけが問題になっているのである（『探求』 I § 1）」<sup>5)</sup>。ウイトゲンシュタインは、原初的な言語ゲームにおいては「意味」といったものは全く問題になっていないとしている。

まずこのような原初的な言語ゲームを習得している段階の子どもには、物事を言葉で説明したり定義したりして教えることはまだできない。例えば、赤いリングを指して「この色の名前が『赤』だ」と教えたり、「この果物の名前は『リング』と言うのだ」と教えることはできない。このように対象を直接指して説明したり定義することを「直示的説明」、「直示的定義」と言うが、このような子どもはまだ直示的説明・定義によって学習することができない。なぜなら、まだこの段階の子どもは「ものの名前を問うことができない（『探求』 I § 6）」からである。つまりまだ「名前」という概念を習得していないからに他ならない。

ではどのようにして学習するのか。ウイトゲンシュタインはこの段階の学習を「直示的教示」と呼んでいる。直示的教示とは、例えば子どもにリングを指差して「リング」、「リング」、「リング」と繰り返し繰り返し声に出して言ってやることや、消防自動車や赤信号、赤い服など赤いものを指差して「赤」、「赤」、「赤」と繰り返し声に出して言ってやるといったことである。第2節の石材運搬ゲームも同様である。「これが『石板』という石材だ」、「この石材の名前は

『石板』と言うのだ』と直示的説明・定義を用いて教えることはできない。石板を指したり、石板を持ったりしながら、「石板」「石板」と繰り返し言ってやるといった直示的教示が行われる。それは説明や定義ではなく、いわば「訓練」であるり、「躰」に他ならない<sup>6)</sup>。

## 5：言葉と行為は意味抜きで直接結合する

そしてこの直示的教示において言葉と行為が直接結合される。「リンゴ」という文字を読んだら、「ミカン」や「ブドウ」と書いてある箱ではなく、「リンゴ」と書いてある箱を開ける。「板石」と言われたら、台石や柱石ではなく板石を持って行く。読んだ言葉、言われた言葉と、「リンゴ」の箱を開けるという行為、板石を持って行くという行為の間に、何ものかが介在しているだろうか。例えば意味といったものが介在しているだろうか。何ものも介在してはいない。換言すれば、ここでは言葉は意味といった媒介なしに、つまり言葉はその意味を考えられることなしに、あるいは言葉はその意味を理解されるという過程なしで、したがって言葉は解釈抜きで、直接行為と結合している。

ではこの意味抜きの原初的な言語ゲームは無意味だろうか、また意味を成さないだろうか。あるいは、これらの言語ゲームにおける言語使用は不十分なのだろうか。これらは不完全な言語ゲームなのだろうか。そのようなことはない。子どもが店の人に渡した紙に書いてあった「五つの赤いリンゴ」という文字は、この買い物ゲームにおいて立派に役割を果たしている。石材運搬ゲームにおいて、親方が言った「板石」という言葉は、弟子に板石を持って来させるという目的を果たしている。つまり、これらの言葉はこれらの言語ゲームにおいて、意味抜きではあるが、有意味に使用されている。

『探求』I § 5：おそらく人は第1節の例を考察すれば、語の意味という一般概念が言語の働きにもやをかけ、どれほどそれを見え難くしているのかが分かるだろう。——しかしもしわれわれが言語の諸現象を原初的な言語使用において調べるならば、語の目的と働きとを明瞭に展望することができ、そのようなもやは晴らされる。

子どもは言語を習う時、そのような原初的な形の言語を用いる。ここでは言語を教えることは説明ではなく、訓練なのである。

言葉はわれわれの活動・生活において使われている。言葉はわれわれの活動・生活において目的を持って使用されている。何らかの役割を果たすべく使用されている。言葉はわれわれの活動・生活において有意味に使用されている。しかしここで「言葉が有意味に使用される」とは「言葉が意味なるものを持って使用される」ということではない。それは、言葉が目的を持って使われる、言葉が役割を果たしている、ということである。

そして、われわれによって使用されない言葉は存在するだろうか。存在しない。それではわれわれの活動・生活が、言葉を有意味にするのだろうか。また、われわれの活動・生活とは別個に言葉が存在するのだろうか。われわれの活動・生活から離れて、それとは独立に有意味な言葉は存在しない。われわれの活動・生活においてしか言葉の有意味な使用はあり得ない。その有意味性は、われわれの活動・生活の有意味性と同じなのではないだろうか。よって、われわれの活動・生活が言葉を有意味にするのではない。ただわれわれが言葉を使って行う活動・生活があるだけである。

## おわりに

『青色本』に象徴的な言葉がある。

『青色本』P.4：しかし、もしわれわれが記号の命であるものを言わなければならないとすれば、われわれはそれはその記号の使用であると言うべきである。

前期ウィトゲンシュタインにおいては、世界が有する「論理」が言語に意味を与えた。それに対して後期においては、言語の使用に先立って存在し、言語を有意味にする「意味」の存在は否定される。そして言語について考察するための軸を、われわれの言語使用という「行為」に置いている。従って、ウィトゲンシュタイン哲学の前期から後期への転換を「言語使用行為の世界の論理からの自立による、言語使用行為の自律」と言うことができるだろう<sup>7)</sup>。

そうであるならば、「五つの赤いリンゴの買い物ゲーム」や「石材の運搬ゲーム」も原初的ではあるが言語ゲームである。そして、数学や物理学など高度に体系化された学問も言語ゲームであることに変わりはない。一見両者はあまりにかけ離れているかのように見える。しかし両者ともわれわれの言語使用行為あり、同じ言語ゲームである以上、繋がっているはずである。よって次の課題は、この両者に連続性を見出すことにある。

文献表（邦訳のあるものは参照させていただきました。ありがとうございました。）

### L. Wittgenstein

- ・『論理哲学論考』（『論考』）：*Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, 1922. 邦訳：『論理哲学論考』、坂井秀寿訳、法政大学出版局、1968年；『論理哲学論考』、奥 雅博訳、ウィトゲンシュタイン全集1、大修館書店、1975年；黒崎 宏訳・解説、『『論考』『青色本』読解』、産業図書、2001年；野矢茂樹訳、『論理哲学論考』、岩波書店、2003年。
- ・『哲学的文法』：*Philosophische Grammatik*, ed. R. Rhees, tr.A. J. P. Kenny, Basil Blackwell, 1974. 邦訳：『哲学的文法1』、山本信訳、ウィトゲンシュタイン全集3、大修館書店、1975年、『哲学的文法2』、

坂井秀寿訳、ワイトゲンシュタイン全集4、大修館書店、1976年。

- ・『青色本』：The Blue and Brown Books, Basil Blackwell, 1975. 邦訳：『青色本』、大森荘蔵訳、ワイトゲンシュタイン全集6、大修館書店、1975年；黒崎 宏訳・解説、『『論考』『青色本』読解』、産業図書、2001年。
- ・『哲学探求』（『探求』）：Philosophische Untersuchungen, ed. G. E. M. Anscombe and R. Rhees, tr. G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell, 1953. 邦訳：『哲学探究』、藤本隆志訳、ワイトゲンシュタイン全集8、大修館書店、1976；黒崎 宏訳・解説、『ワイトゲンシュタイン『哲学的探求』第I部・読解』、産業図書、1994；『哲学探究』、丘沢静也訳、岩波書店、2013。

#### その他

- ・聖アウグスティヌス、服部次郎訳、『告白（上）』、岩波文庫、1976年。
- ・拙論、「私的言語と『論理哲学論考』」、『福井県立大学論集』、第31号、2008年。
- ・拙論、「痛み概念」、『福井県立大学論集』、第32号、2009年。
- ・拙論、「直示的教示」、『福井県立大学論集』、第34号、2010年。
- ・拙論、「原初的な言語ゲーム」、『福井県立大学論集』、第37号、2011年。
- ・拙論、「言葉の理解と使用」、『福井県立大学論集』、第39号、2012年。

#### 注

- 1) 『探求』において最も引用される節の一つであるので、全文を引用しておくことにする。

『探求』 I §43：「意味」という語が用いられる——全ての場合ではなくとも——多くの場合に、次のように説明することが出来る：ある語の意味は、言語〔ゲーム〕におけるその語の使用である。そして時として人は、名前の意味をその担い手を指示することによって説明する。

なお、[ ] 内は塚原が挿入した。以下同様である。また「意味の使用説」と記したが、ワイトゲンシュタインが意味を使用だとする「学説」や「理論」を展開している、ということではない。そう解釈することはワイトゲンシュタインが最も嫌うところであろう。

- 2) 『論考』の言語観については拙論「私的言語と『論理哲学論考』」を参照。
- 3) 言葉の意味は心的な何か、例えばイメージといったものではないという点については、拙論「言葉の理解と使用」を参照。
- 4) 「言語ゲーム」という言葉は後期ワイトゲンシュタインのみならず、『哲学的文法』を中心とする中期ワイトゲンシュタイン哲学においても使用されている。前期哲学から中期哲学への転換は時間上の断絶もあり、180度転換と言うと大げさだが、スローガン風に言えば「言語の世界からの自立による、文法の自律」ということになるだろう。これに対して中期哲学から後期哲学への転換は連続的な考察の深化であると言えよう。したがって、中・後期両者におけるこの「言語ゲーム」という語の使用には継続性もあるものの、相違点もある。そしてこの相違は中期哲学と後期哲学の相違に直結している。簡単に述べれば、中期において言語はチェスや将棋といったきっちりとした規則によって支配されているゲームをアナロジーとして捉えられており、「言語ゲーム」は一定の規則によって支配される言語使用体系とみなされている。それに対して後期においては見てきたように、言語はわれわれの活動の重要な要素であり、「言語ゲーム」はわれわれの言葉を使用して行う活動そのものとなっている。



- 5) 『探求』第1部第1節は様々な意味で重要な節だと思われるので、その全文を訳出しておくことにする。

『探求』 I § 1 : アウグスティヌス、『告白』第1巻第8章。「すなわち、年長者たちが或るものの名を呼び、その音声にしたがって、身体を或ものの方へ動かしたとき、わたしは、そのものをわたしに示そうと思うさいには、かれらはその発する音声によってそのものを呼ぶということを見て、覚えた。かれらがそのものをわたしに示そうとすることは、いわば万民共通の自然の言語である身体の動きによってあきらかであった。そしてこの言語は、顔つき、目つき、その他四肢の動き、音声のひびきからできていて、ものを求め、手にいれ、斥け避けようとする心の動きを示すものである。このように、いろいろな言葉がさまざまな文句のうちにしかるべきところで用いられるのをしばしば聞いて、わたしはそれらの言葉がどのようなものの符号であるかを推知するようになった。そしてわたしの口はそれらのしるしになれてきて、わたしはもう自分が心に思うところをそれらによって告げるようになった。(聖アウグスティヌス、『告白』)」

アウグスティヌスのこの文章は、われわれに人間の言語の本質について一定の像を与えているように思われる。その像とは、言語の語は対象を名指す名前であり、そして文はその様な名前の結合だ、というものである。——われわれは言語についてのこの像の中に、如何なる語も意味を持つ、という考えの根源を見出す。この意味というものは、語に対応づけられている。それは語が表す対象なのである。

語の種類にはさまざまなものがあることについては、アウグスティヌスは何も言っていない。言語の習得をアウグスティヌスのように記述する人は、第一に「机」、「椅子」、「パン」といった名詞と人々の名前を考え、次の段階になってはじめてある種の働きや性質の名前を考え、そしてその他の種類の語についてはそのうちどうにかなる、と考えているのではないだろうか。

さて、次のような言語使用について考えてみよう。私がある人を買ひ物にやる。その際、私は彼に「五つの赤いリング」と書いてある紙片を渡す。彼は店に行き、その紙片を店の人に渡す。店の人は「リング」と書いてある箱を開け、次に表の中に「赤い」という語を探し出し、それに対応している色見本を見出す。次に店の人は——私は、その店の人が数詞を暗記していると仮定する——数詞を順に「5」まで唱え、各数詞を唱える度毎に、箱から色見本の色を持っているリングを一つずつ取り出す。——このように、あるいはこれと似た仕方では語を使用する。——「しかし、『赤い』という語を、何所にそして如何に捜すべきか、そして『五つ』という語で何をはじめべきかを、店の人はどのようにして知っているのだろうか。——ところで私は、この店の人が私が記述したように振る舞う、と仮定している。説明はどこかで終わりになるのである。——それでは、「5」という語の意味は何か。——ここではそのようなことは、全く問題になっていない。ただ、「5」という語がどのように使用されるのか、ということだけが問題になっているのである。

- 6) 「直示的定義」、「直示的説明」、「直示的教示」については、拙論「直示的教示」および「原初的な言語ゲーム」を参照。
- 7) ウィトゲンシュタイン哲学の展開には前期と後期だけではなく、『哲学的文法』を中心とする中期もある。これらの関係について大まかな見通しを述べておくならば、次のようになるだろう。前期は見てきたように、言語に対して世界の論理が超越的に存在し、これが言語を支配し有意義にしていた。これに対して中期においては、前期の「論理」に代わって「文法」が言語と世界を捉えるための軸とされる。文法は具体的な命題に先立って存在し、言語を支配し、その意味を規定している。そして世

界は文法によって相対的に規定されることになる。従って前期から中期への転換を、先に示したように「言語の世界からの自立による、言語文法の自律」と表現することができるだろう。そして後期においては、軸は「言語使用行為」に置かれる。つまり、言語使用行為は論理や文法による支配から解放され自立し、自らを自らが律してゆくことになる。